

毒蛾皮膚炎（毛虫皮膚炎）

庭や公園あるいは野山などの植物の近くに行く機会があり、皮膚のあちこちに赤いぶつぶつが出来てかゆみ強い時は、毒蛾（どくが）の毛虫にやられた可能性があります。

毒蛾の毛虫には毒針毛（どくしんもう）が1匹に50万本から600万本あって、それに触れた人の皮膚に強いかゆみを伴う派手な皮膚炎を起こさせます。その皮膚炎を毒蛾皮膚炎（どくがひふえん）といいます。



毒蛾の毛虫は危険を感じると毒針毛を空中へ大量に発射して身を守ります。毛虫に触れていないのに毛虫に近づいただけでやられるのはそのためです。風下にいるとこの毒針毛がシャツの中、下着の中にまで入り込んできます。

毒蛾皮膚炎は毒蛾の幼虫の毛虫による場合が殆どですから毛虫皮膚炎ともいいます。しかし毒蛾の成虫の蛾および毒蛾の卵の付着物でやられることもまれにあります。また毒針毛の付着した戸外で乾した洗濯物によって起こることもあります。



毒蛾でよく知られているのは、ドクガ・チャドクガ・モンシロドクガの3種類です。チャドクガは年に2回の発生です。ちゃどくがの大好きな植物はサザンカ・ツバキ・チャなどのツバキ科です。ちゃどくがは4月から6月に越冬した卵から毛虫が生まれます。毛虫は脱皮を繰り返して成長して最大体長が約2.5cmになります。毛虫は7月から8月に蛾になって卵をうみます。その卵からは直ちに毛虫が生まれ脱皮して成長し9月から10月に蛾になって卵をうみます。その生まれた卵は越冬します。このライフサイクルから、チャドクガの害は4月から10月におこるのです。



症状

強いかゆみと独特な「ブツブツ」が特徴です。

この皮膚炎には免疫は生じません。何回でも繰り返しおこります。

治療

疑いがあればまず、シャワーで毒針毛をこすらずに洗い流します。石鹸は用いたほうが良いでしょう。1日に数回行います。

病院では通常ステロイド剤の軟膏を使用します。また、痒みに対しては、抗ヒスタミン剤あるいは抗アレルギー剤を内服します。通常1週間以内には軽快しますが、引っ掻くことにより伝染性膿痂疹（とびひ）を合併することもあります。